

## 近年の雑誌記事における「妙齡」の用法

— 『週刊朝日』『AERA』本文データ・ベースを利用して —

菊 地 悟\*

(2015年2月12日受理)

Satoru KIKUCHI

Using the "Shūkan Asahi" and "AERA" Databases to Investigate  
the Use of the Term "Myōrei (妙齡)" in Mode Magazine Articles

### 第1章 はじめに

「妙齡」という語の意義について『日本国語大辞典』第二版(2002-2003、小学館)では、「[[名] (「妙」は若いの意) 若い年頃。としごろ。特に女性にいう。妙年。」と記している。ちなみに「妙年」の項には、「[[名] うら若いとしごろ。妙齡。」とあり、共通して「若い」年齢を指すものとされている。

また、『大漢和辞典』修訂版(1984-86、大修館書店)における「妙齡」の意義記述は、「㊦年がわかい。うらわかい。年頃。妙年。妙齒。(用例略) ㊦ miao4 ling2 丁度よい頃。」となっている。㊦の用例には、『宋史』などがあげられ、古くから漢籍に見られる語であることがわかる。なお、「妙」の項には「㊦㊦わかい。ちひさい。」(太字は原文のまま。訓の一つであることを示している。)とあり、『日本国語大辞典』冒頭の注記と符合している。

現代語の辞書に目を移し、まずは『明鏡国語辞典』(大修館書店)の記述を見ると、初版(2002)・第二版(2010)とも、「[[名] 若い年ごろ。特に、女性の若い年ごろ。妙年。▽「妙」は若い意。」という記述であり、『日本国語大辞典』とほぼ一

致している。この辞書は、誤用例を積極的に収載していることで知られるが、こと「妙齡」に関しては、特に誤用例を挙げてはいない。

一方、『新明解国語辞典』(三省堂)の最新版である第七版(2013)には、「[[壮年以上の人や男性から見た] 女性の結婚適齡期の称。〔古くは、男性にも言った〕】とある。この記述は管見の限りでは、少なくとも第四版(1989)以降、共通の記述であるが、他の辞書よりも対象・使用者を限定したものになっている。

いずれにしても「若い年ごろ」という点では共通しているのであるが、近年のインターネット等では、以上のような辞書の記述から外れた例が見られる。

たとえば、インターネット上の質問サイトである「Yahoo! 知恵袋」には、

「妙齡の女性」という言葉を聞きました。

若い女性ですか？ 年増の女性ですか？

という質問(2007年4月30日付)に対する回答に次のような記述が見られる。

会社の同僚の間で盛り上がっていた話、もともと40代前半の人が「ああ～妙齡のこう、落ち着いたいい女とご飯でも食べに行きたい～！」みたいなことを昼からうっとり

\* 岩手大学教育学部

話していて、それにまわりの同僚が乗ってきて・・・みたいな話なんだけど。

彼曰く、彼の妙齢は「30中盤～後半の女性」らしい。そこへ入社3年目男、「妙齢ってなんですか〜？」と爆弾発言。みんなが姦しくフォローする中で国語辞典を引くとなんと「結婚適齢期のお嬢さん」だった！みんな「年齢的には微妙に若くない魅力的な人」みたいな意味で使っていたよね～。どこかのテレビ番組じゃないけど日本語は難しい。

([http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q1011458805](http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1011458805))

こうした誤解はかなり広がっているようで、ネット上のアンケートサイト「人力検索はてな」において、2005年6月25日に掲げられた「【妙齢】って聞いていくつくらいの歳の人を想像しましたか？」に対して寄せられた先着100名による回答の結果は

10代：1名	21歳～25歳：10名
26歳：4名	27歳：1名
28歳：4名	29歳：2名
30歳：19名	31歳：1名
32歳：5名	33歳：1名
34歳：1名	35歳以上：51名

となっている。(http://q.hatena.ne.jp/1119683187) アンケート実施者は26歳～34歳の回答が多いと想定して選択肢を設定したのであろうが、結果は35歳以上が過半数を占めることになった。上記の男性の認識「30中盤～後半の女性」と符合しているようにも見えるが、年齢の選択肢を高年齢方向に増やしていけば、40代以降を「妙齢」ととらえる回答も出てきた可能性があるだろう。

事実、「妙齢のご婦人方に聞いてみました」というタイトルで、「年齢層は40代から60代、うち7割はご婦人方。(略) そのご婦人方に参院選について聞いてみた。」と記したブログもあった。

(<http://oreha40714.iza.ne.jp/blog/entry/248647>)

このように、近年「妙齢」の示す年齢が、若いというには語弊のある年齢にまで達しているという、いわば「妙齢の高齢化」の現象が進んでいると思われるのである。しかし、この現象について文献調査に基づく考察は、まだなされていないようである。

本稿では、まず近年の雑誌における「妙齢」の用例を調査し、近年の「妙齢」の用法、示す年齢の変化、等について考察することにしたい。

## 第2章 『週刊朝日』『AERA』に見る「妙齢」

近年の用例を考察するため、本稿では朝日新聞社のオンライン記事データベース「聞蔵Ⅱ(きくぞうツー) ビジュアル」のコンテンツの一つである「朝日新聞1985～、週刊朝日・AERA 全文記事データベース」のうち、『週刊朝日』『AERA』のデータを利用することにする。

このデータベースには、『AERA』については1988年5月24日発行の創刊号以降の記事が、一方『週刊朝日』については2000年4月以降のニュース記事が、テキスト形式で収録され、全文検索により、見出し・本文に検索語を含む記事を表示することができる。

今回は岩手大学附属図書館のサイトからログインして、研究室よりオンライン検索を行った。

「妙齢」で検索したところ、17の記事に18件の用例が見つかった。表1には、誌名・発行年月日・本文か見出しかの区分・使用例・「妙齢」の使用された対象・筆者(話者)を示す。雑誌記事という性格上、記者の執筆が多く、最後の筆者(話者)については、年齢を確認できないことがほとんどだが、その場合は名前から推測できる性別だけを示した。

表1 『週刊朝日』『アエラ』に見える「妙齢」

No.	誌名	発行	区分	使用例	対象	筆者（話者）
1	ア エ ラ	1990/ 6/5	本文	2階建ての新築ビルで、1階は <b>妙齢な</b> 女性が4人程働く、微香性オフィスとなっている。	国際政治学者・舛添要一の自宅オフィスで働く女性たち	吉田司(男45)
2	ア エ ラ	1998/ 7/13	本文	<b>妙齢</b> の女性ファンの数にかけては杉良太郎さんと双璧と演劇界でいわれているだけに、熱烈な「追っかけ」は珍しくはない。	歌舞伎俳優・市川猿之助のファン	保科龍朗(男)
3	ア エ ラ	2002/ 12/9	本文	料理は4500円のコースのみ。客単価は7千円前後という。 <b>妙齢</b> のカップルや接待などの男性客が多い。	料亭を改造した和風ダイニングの店の客	横田由美子(女)
4	ア エ ラ	2004/ 9/20	本文	夫たちは、主婦が合コンでモテモテなのを知らない。独身なら「男に敬遠されがちな年齢」も、主婦と聞けば「 <b>妙齢</b> 」に変わるのだ。	合コンに夢中な主婦たちの年齢	同上
5	ア エ ラ	2007/ 10/22	本文	50代サラリーマンは、これまでずっと女性歌ばかりを歌ってきた。(中略)恋人と別れたいのに思い切れない切ない女心を、 <b>妙齢</b> の娘を持つオヤジが歌い上げる。	「女歌」を愛唱する中年男性の娘(20代?)	朴順梨(女)
6	ア エ ラ	2007/ 10/22	本文	1年間頑張って働いた自分にご褒美をあげたい、くらいの気分でしたはずの <b>妙齢</b> 女子たに突きつけられたのは、オダギリジョー(31)と20歳の女優・香椎由宇の結婚という現実だった。	30代俳優の20代女優との結婚報道にショックを受けた女性たち	坂口さゆり(女) 木村恵子(女) 片桐圭子(女)
7	週 刊 朝 日	2009/ 2/27	本文	東京・芝にそびえ立つ、35階建ての超高級賃貸マンション。(中略)その建物のエントランス前で構えていたカメラの先に、 <b>妙齢</b> の美女を連れた老紳士が写り込んでいた。	脱税容疑者の恋人と見られる20代OL	容疑者の知人男性
8	ア エ ラ	2009/ 12/7	本文	東京・南青山の古い雑居ビルが村上ファンドの「残党」たちのアジトだった。リーダーは <b>妙齢</b> の女性スナイパー。戦場は株式市場から不動産市場に変わった。	破綻した不動産会社の再生に成功した女性(34)	大鹿靖明(男)

9	週刊朝日	2010/6/11	本文	その一室に、山田氏と関係のある <b>妙齢の女性</b> Aさんと幼い子どもが住んでいるというのだ。	政党党首の愛人と目される女性	『週刊朝日』取材班
10	アエラ	2011/9/26	本文	確かに、泥だらけで走り回り、服のまま川に飛び込むなんて、 <b>妙齢の女性</b> の日常ではあり得ない。	「くの一武道大会」に出場の20、30代の女性	野村美絵(女)
11	アエラ	2012/5/21	本文	近ごろ、「付け八重歯」が <b>妙齢の女性</b> たちの間ではやっている。	急増する「八重歯ガール」。大半が20代	野村昌二(男)
12	週刊朝日	2012/6/29	本文	「(略) それどころか、同行者を見ると <b>妙齢の女性</b> がいたりすることもあるので、やはり元気なんだと思います」	森本防衛相の外遊に同行する女性	公安関係者
13	週刊朝日	2012/10/12	本文	初めての来店である旨を伝え、受付を済ませて、「お手並み拝見」と施術ベッドへ。すると、受付をしてくれた <b>妙齢の女性</b> が、おもむろに指圧をスタートする。	激安マッサージ店の受付兼マッサージ師の女性	木村敦彦(男)
14	アエラ	2012/11/5	見出	●若い僧侶と <b>妙齢女性</b> が	「高野山カフェ」に参加の女性たち	三橋麻子(女)
			本文	体験企画以外でも、フロアのあちこちで、若いお坊さん呼び止め、 <b>妙齢の女性</b> が相談事をしている。初めて見る光景だ。		
15	週刊朝日	2013/7/5	本文	神様、仏様、どうか良いご縁をーなんてお願いをしていた <b>妙齢の女性</b> たちが、結婚のお相手として「お坊さん」に目を付けた。	僧侶とのお見合いをする女性たち	山岡三恵(女)
16	アエラ	2014/2/10	本文	宮崎県政がざわつき始めた。あのオトコが帰ってくる。しかも、 <b>妙齢のオンナ</b> を連れてー。	東国原元知事の再婚相手と噂される女性	藤田知也(男)
17	週刊朝日	2014/12/12	本文	「釧路では <b>妙齢の女性</b> に『安倍さんはテレビで見るより若いね、いい男だね』と言われ、気持ちよく各地を回っています」	安倍首相の全国遊説の聴衆	安倍首相(男)

用例1の「妙齢なる女性」4名について、具体的な年齢に関する記述は無い。しかし、以前「日本語情報処理」の授業でこの用例を示した際、受講の女子学生より、「微香性オフィス」という語

が若い女性を連想させるという指摘があった。強い香りよりもそこはかかない香りを好むのは若い女性ということらしい。

用例2は人気歌舞伎役者にストーカー行為を繰り返した51歳女性に関する記事。「妙齡の女性ファン」の具体的な年齢は全く記述されていない。だがチケット代が安価とは言えない歌舞伎のファンとなると、ある程度の収入のある年代ではないかと思われる。少なくとも大学生よりは上の年齢層ではないだろうか。焦点のストーカー女性の51歳という年齢が「妙齡」に含まれているのかどうかは、判断の難しいところである。

用例3の「妙齡のカップル」は、女性だけでなく男性も「妙齡」であると思われる。これも具体的な年齢の記述は無いが、「本物の料亭は一人3万円以上はする」ところ、客単価7千円前後という手頃な値段で料理を楽しむ点から考えると、比較的若い年代のカップルではないだろうか。

用例4の「『妙齡』に変わる」は、「男に敬遠されがちな年齢」と対照される文脈であることからして、「男にとって絶好の恋愛対象となる年齢」とも考えられる。しかし一方、記事に登場する、実年齢35歳の主婦が「20代といっても通用しそうな雰囲気」という記述からは、「若い年ごろ」という解釈も可能かもしれない。合コンに参加するのは「20代後半から30代の主婦たちが中心」ということであり、登場する主婦の年齢も、35歳が2名、31歳・30歳が各1名となっている。実年齢では従来の「妙齡」よりも上の年齢層であるが、ここでの「妙齡」には「(実年齢よりも)若く見える」というプラス方向のニュアンスが感じられる。

用例5の「妙齡の娘」は、50代の父親の娘である。父親が格別に早婚でなければ20代と見るのが自然であろう。文脈としては、「成長した娘もいる分別ある年齢の男性が、カラオケで女歌に熱中している」ことを表現する意図によるもので、「妙齡」は「結婚適齡期」ぐらいの意味であろうか。

次の用例6の記事は、

せめて25歳くらいにしてよ。

20歳なんて、まだ子どもじゃん。

あなただけは、若い子に行ってほしくなかったのに。

と、登場する「妙齡女子」の心情を代弁するような言葉で始まる。記事に登場するのは37歳の「メーカー勤務」の女性と、「都内でダンスのインストラクターとして働く」34歳の女性。彼女たちのような「綺麗でかわいいだけの若い俳優に飽き足らないオーバー30女子たちにはたまらな」い存在だった俳優が20歳の女優と結婚したというニュースに衝撃を受ける。37歳女性は、渦中の20歳女優について「私たちみたいな『負け犬』30女を見て、絶対ああなるものかと戦略を練っている、したたか20代女の典型ですよ」と語り、34歳女性は「自由で個性的な彼を温かく見守ることができるのは年上の女性だと思っていたので、年下を選んだことにも驚きました」と語る。

この記事における「妙齡女子」は、明らかに30代以上を指している。加えて、結婚適齡期にはすでに達していて、にもかかわらず結婚願望がかなわずに、20代女性を羨望する「負け犬」的な存在とされている。ここまで見てきた中でははじめて、「妙齡」をマイナスのニュアンスで使用した用例と言える。

用例7の「妙齡の美女」は、脱税容疑者の恋人と目される女性に対する形容である。容疑者の知人の男性によれば「20代のOL」で、男性記者による地の文でも「30歳以上も年下の美女」と表現されている。

容疑者知人の談話には、「マンションの最上階の3LDKの部屋で同棲状態だった」「超高級店にもふたりで顔を出してたそうです」とある。記事本文ではその談話を導入として「30歳以上も年下の美女を連れ歩き、贅の限りを尽くしてこられたのは、ひとえにキヤノンの発注工事を利用して私腹を肥やしていたからに違いない。」と脱税の具体的内容につながっていく。

容疑者も女性も独身であり、「恋人」と表現されているが、年齢差や経済的援助の点から実質的には「愛人」という印象を受ける。そして、「妙齢の美女」は、このような記事に登場する女性を表現する常套句という感がある。

用例8は、インサイダー取引で問題になった村上ファンドの「残党」である女性が、「戦場」を株式市場から不動産業に変え、「世界最強の投資銀行ゴールドマン・サックスに競り勝った」という、武勇伝風の記事であり、比喩的に「妙齢の女性スナイパー」と、いささか物騒な称号が与えられている。「妙齢の女性でありながら、それにそぐわない凄腕のスナイパー」という含意であろう。このようにイメージのギャップが甚だしい語との組み合わせは、「妙齢」の用法の一つの典型と言えるかもしれない。

この用例の女性の年齢は34歳であるが、ビジネスの第一線で戦う年齢としてはむしろ若い部類に入るであろう。相対的に見ればかなり「若い」のだと思われる。

用例9の「妙齢の女性」は、52歳の政党党首の愛人で、同居する子どもも彼の子と目される女性である。年齢について推測できる記述は特に無いが、用例7ほどではないにせよ、ある程度の年齢差がある、相対的に若い女性ではあると思われる。

用例10は、京都府福知山市で開催された「くの一 武道大会 丹波福知山の段」に赤や黒のくの一 装束で参加した「20、30代の女性49人」についての記事である。ただ、

確かに、泥だらけで走り回り、服のまま川に飛び込むなんて、妙齢の女性の日常ではあり得ない。なんだかいろいろふっきたような気持ちになって、福知山城を後にした。

という結びの文は、「『くの一』の何が、彼女たちを引き付けるのか」を検証すべく参加した記者自身の感想である。したがって、「妙齢の女性」が一般参加者49名なのか、記者自身をも含めている

のか、微妙なところである。もっとも、記者が参加者より年長だと明示する記述も無いので、おそらくは同年代としての感想かと思われる。仮に自らについても「妙齢」と述べているのだとすれば、ここまでには無かった用法になるが、少なくとも参加者について見れば、従来より少し年齢層の広い「若い女性」と言えよう。

用例11の「妙齢の女性たち」は、アクセサリ的に「付け八重歯」をする女性たちである。記事に実年齢付きで登場するのは20歳と23歳の女性であるが、施術をするクリニックへの取材によれば「月に5、6人が施術に訪れ、大半が20代前半の女性できれいな歯並びの人が多い」という。

ここにおける「妙齢」は、本来の対象である「若い女性」について用いられていると見て良いであろう。

用例12は、森本敏防衛相（当時）の健康不安説に関する記事で、不安説の反証のような「森本氏を知る公安関係者」の談話中で用いられている。

本文中では「妙齢の女性」についての記述は特になく、家族や付き添い、看護師などという可能性も全く考えられないわけでない。しかし、これを読んだ読者の多くは、用例7・9のような、「(不釣り合いに)若い恋人・愛人」を想像してしまうのではないだろうか。「妙齢の女性を同行→やはり元気」という論法も多分に手伝っているが、「妙齢」という語がこうした文脈で多用されることにより、こういったニュアンスがかなり固定化しているのではないだろうか。

用例13の記事は、激安マッサージ店のルポルタージュである。どんなマッサージ師が現れるのかと思えば、「受付をしてくれた妙齢の女性」がおもむろにマッサージを開始する。一見、用例8のような「イメージのギャップ」を思わせる用法であるが、記者はあくまでも「おいおい、受付がマッサージして大丈夫かよ」と戸惑っているのであって、マッサージ師が「妙齢」であることに驚

いているわけではない。

ここでの「妙齡の女性」は、本来の用法の「若い女性」であろう。何歳ぐらいかという情報は特に無い。

用例14は、記者が高野山での修行を体験する記事の導入部、東京・丸の内に高野山から若手の僧侶たちがやってくる「高野山カフェ i n 丸の内ハウス」というイベントの描写の部分に、節の見出し中で「妙齡女性」、同じ節の本文中で「妙齡の女性」が使われている。

見出しの直後には「20歳の女子大生2人組」が僧侶に「あきらめなくてはならないのですが、ある人への執着が捨てられません」と相談するくだりがあり、見出しの「妙齡女性」の典型であるように思われる。しかし、同じ節の後の方では「フェイスブックでみると関心が高いのは首都圏在住の30代半ばという層です。」とあり、別の節ではイベントの「参加者の8割は女性。年齢は様々だが、オフィス街という場所柄か、30代から40代の女性が多い。」ともある。

だとすると、ここでの「妙齡」は、二十歳そこそこから40代まで従来よりも幅広い年代を指しているとも考えられよう。

用例15の記事は、結婚のお相手として「お坊さん」に目を付け、「清潔感のある袈裟（けさ）姿にクラッとくる女子たち」の、「僧侶とのお見合い、いわゆる“坊コン”」の記事である。「神様、仏様、どうか良いご縁をーなんてお願いをしていた妙齡の女性たちが」というのだから、結婚願望の強い、やや適齡期を過ぎかけた年代の女性たちであろう。つまり、用例6と共通した用例だと考えられる。

ただし、具体的な登場人物の年齢は、「泊まりがけで来たという女性（30）」とある以外の記述は無い。彼女を平均的な年齢と仮定すれば、20代後半から30代前半といったところであろうか。

用例16は、「都知事選不出馬」を表明した元宮崎県知事・東国原氏が宮崎市的高级マンションを購入したことから浮上してきた県知事選再出馬の噂に関する記事中に見られる。

「妙齡のオンナ」と記述された渦中の女性は、「宮崎県庁の臨時職員だったAさん」で「30代半ばの元レースクイーン」ということであり、身を固めて新居を構えて再出馬へつなげる思惑だと噂されているという。

これもまた、用例7・9と同様、「(不釣り合いに)年の離れた、若い恋人」の範疇に入るものと思われる。

最後の用例17は、昨年末の衆議院総選挙に関する記事の中で使用されている。安倍首相が、釧路の「妙齡の女性」から「安倍さんはテレビで見ると若いね、いい男だね」と言われたことを、他の遊説先での演説の中で笑いを誘う話題として使ったのであろう。

首相に軽口をたたく積極性から見て、実際には「妙齡の女性」と言うにははばかれる年齢の女性だったかもしれない。しかし、自分のことを「妙齡の女性」と言っていたと伝え聞いた本人を喜ばせる「リップ・サービス」的な表現とも考えられる。だとすれば、ここまでの例にはなかったパターンと言えるだろう。

以上、17例の「妙齡」について、その用法を見てきた。章を改め、用例から帰納できる近年における「妙齡」の用法をまとめておくことにする。

### 第3章 近年における「妙齡」の用法

第2章で見た「妙齡」が使われる対象は、大別して次の6種に分類できそうである。

- (1) (比較的)若い年齢 (の女性)  
用例1・2・3・8・10・11・13・14
- (2) 男性にとって絶好の恋愛対象となる年齢 (の女性)  
用例4

- (3) 結婚適齢期 (の女性) 用例5  
 (4) 結婚適齢期を過ぎかけた年齢 (の女性) 用例6・15  
 (5) 男性と不釣り合いなほど若い (女性) 用例7・9・12・16  
 (6) (リップ・サービスとして) 若い (女性) 用例17

本来の用法と言える(1)が最も多かった。しかし、その年齢は20代はもちろん、30代にも普通に使われ、40代に使われる例もあった。逆に10代以下に対して使われた例はなかった。用例8のような「若い女性でありながら」というニュアンスの感じられる例もあった。年齢不詳の例も見られたが、若い年代を漠然と指すのには重宝な表現なのであろう。

(2)は、用例4に見るように、「男性がときめくような魅惑的な年齢」というところである。単に「若い」というだけでないニュアンスが含まれているようである。

(3)(4)はいずれも「結婚適齢期」を指しているが、(3)は20代前半、(4)は20代後半から30代と、年齢差がある。(4)のように、結婚適齢期を過ぎかけた女性に対して「妙齢女子」などと使うようになったのは、近年の特色であるかもしれない。女性の社会進出・晩婚化などの社会的変化に伴い、「妙齢」の語も高年齢化が進んだということであろうか。用例6はその典型的な例ともいえ、ここではむしろマイナスのニュアンスで「妙齢」が使われているのである。

(5)は、ゴシップ記事によく使われるような「妙齢」の用法である。多くの場合、スキャンダル的な関係の女性に対して使われるようである。問題の人物が若い女性と恋人・愛人となることに、けしからんというニュアンスが感じられる。ある意味、(2)の裏返しをやっかみが感じられる用法でもある。

そして(6)の用法であるが、もしかすると40代、いや50代以上であるかもしれない女性のことを「妙齢」と表現することは「リップサービス」

というより「お世辞」かもしれない。ここで思い出されるのは、人気司会者みのもんた氏が、スタジオ観覧の中高年のご婦人たちに「お嬢さん」と呼びかける場面である。見え透いたお世辞と十分わかっているはずなのに、言われた本人も含めて客席はどっと沸く。用例17の、安倍首相の「妙齢」は、そのような要素を持った用例ではないだろうか。

以上、近年の「妙齢」には、本来の用法である「若い年齢」の例が多いものの、その年齢自体はかなりの幅を持つようになり、時には「結婚適齢期を過ぎかけた」というマイナスのニュアンスまで含まれていること、また「リップサービス」としての用法らしいものが見られること、などを指摘できると思われる。

#### 第4章 おわりに

本論では、『週刊朝日』『AERA』という2種類の週刊誌の本文データ・ベースにより「妙齢」の用例を検索し、それにより、ここ25年以内の用法についての考察を行なった。

しかしながら、25年間で17例というのは、考察にはいささか少なすぎる感がある。新聞社系の週刊誌であるという点から、ゴシップ中心の雑誌とは違い前章の(5)のような例が少なかった、ということがあったかもしれない。

一方、「妙齢」の語が使われる機会そのものが少なくなったという可能性もある。仮にそうだとすれば、一般国民にとっては、存在は知っているが、意味はよくわからない語彙となってしまっているのかもしれない。そういった人々は、誤用例も冗談で使われた例も、正しい用法と思い込み、用法の変化または乱れを促進してしまう危険性を持っている。

誤解の要因の中には「妙」という漢字の理解度が下がっているという要因もあるのではないだろうか。冒頭で「微妙な年齢」と誤解していたとう例を紹介したが、若い世代にとって、「妙」は「奇



妙」「妙な臭い」などの「妙」であって、「絶妙」「妙技」の「妙」ではなくなっているのかもしれない。まして「妙なる」を「たえなる」と読むことは難しいことだろう。「ミョウな年齢＝若いとは言えない年齢」と逆方向に解釈されている可能性すらあろう。

ともあれ、雑誌データ・ベースによる考察では不十分な点も、新聞記事データ・ベースによる用例収集なら、相当数の用例を加えることができ、より深い考察が可能になると思われる。

次稿では、同じく「聞蔵Ⅱ」を利用して、ここ30年の『朝日新聞』の用例を検索し、さらなる考察を加えることとしたい。さらには、創刊当時の用例を元に、「妙齡」の意味・用法の変遷を明らかにしたいと思う。